—暴かれた航空機商戦—

金色の翼

本所次郎

金色の翼

本所次郎

講談社

金色（こんじき）の翼——暴かれた航空機商戦——

著　者　本所次郎

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一
〒一一二　振替東京八—三九三〇
電話東京〇三九四五—一一一一（大代表）

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

初版発行　昭和五十八年十月一日

定価一三〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
© Jiro Honjo 1983 Printed in Japan

ISBN4-06-200831-9 (0)　（文二）

金色（こんじき）の翼

―暴かれた航空機商戦―

目次

第一部
プロローグⅠ　8
プロローグⅡ　21
二人の来訪者　35
作戦変更　46
脅迫のタネ　56
機種選定の怪　66
大蔵省資金　77
代行契約　87
念書コピー　98
マル秘文書　109
渡米調査　119
仇敵の放逐　130
社長失脚　141
第二部
空中契約　154
業界の再編　168
窮地　178

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

情報源 195
遅延工作 206
倒産 217
嫉妬 232
連続事故 244
政治屋 256
政策改定 269
デモ飛行 280
X氏登場 293
二人の使者 299
商戦本番 307
五億円 319
さあ中国だ 329
逆転の陰謀 336
国防会議 346
土下座 352
機種決定 359
エピローグ 369
あとがき 374

この小説はフィクションであり、ストーリーの構成上、仮りに、モデルと酷似した人物が実在したとしても、筆者の意図するものは何もない。　筆者

装幀　野中　昇

金色（こんじき）の翼――暴かれた航空機商戦――

第一部

プロローグ I

「民間の関係者の大方が逮捕されたようだが、政府高官とやらにはいつ手が伸びるのかね。それともネグるかな」
「そうは問屋がおろしません。半年がかりでムードづくりをしてきたんですから……。最後をビシッときめる。ケジメをつけないことには気持ちが悪い。国民も承知しませんよ」
「大分、煮詰まっているのかね」
「そう、二、三日中……。いや、一両日中かも……」
「ほーうッ。とりあえずは航特委（航空対策特別委員会）関係者、または政務次官クラスだろう」
「いやいや、木下の眼の坐りどころはドンをねらってますね。地検の調べも照準は広田そのもののようです」
「まさか！　――君、前首相を逮捕するなどということは……。木下や検察陣は、内外に及ぼす計り知れない影響を読んでいるんだろうな」
「少なくとも検察の上層部は読んでいるでしょう。広田の力は警察は抱き込んだが、検察まで及ばなかった。その検察は、広田がなき後も、日本の政治は立派に保守本流の道を辿ると判断しているようです。首相の木下の場合は、正義面して美辞麗句を並べてますが、ただ広田が憎いだけ。それと〝木下降ろし〟の党内の風潮に歯止めをかけて、身の安泰をはかる。あの粘着性で、ここまで追い詰めた、というのが真相でしょう」
「当たらずとも遠からずといったところだろうが、木下はトッちゃん小僧。本気で政界浄化とやらを考えているようだ。それに、悪の君が加勢するとは似つかわしくない。福岡君が、君が福岡派を離れ、木下の要請で政調会長に就いた時、はぐれ烏一匹と称したが、君も大利根のようにコウモリと呼ばれ、いずれ本流からはずれるようになるぞ。まあ、広田の逮捕はやむをえないかも知れん。彼は何かと動き過ぎた。君の権益も侵したことだしな。かつて民友党のプリンスと呼ばれた君は、ライバルの広田にいつの間にか追い抜かれた。確か年も一つか二つ違い。広田追い落としの裏には、妬みもあるんだろう？」
「先生、随分ときついことを言いますなぁー。まぁーね、真実に近いところでしょう。アハハ。しかし、政調会長という職務は、総裁・首相の考えを党内に徹底浸透させ、さらに党内融和をはかるという役目ですから、時に誤解を受け、憎まれっ子になる覚悟が必要です」
「そうかな。君が木下や法務大臣の稲村治郎を焚付けている、という噂が耳によく入ってくる」
「いや、まいりますねぇー。稲村はなかなか面白い男で、これは誤算でした」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「誤算？　――。嬉しい誤算だろう。張り切って名言を吐いておる。お調子者だ」
「そう、生一本のドン・キホーテ。しかし先生、おっしゃるとおり、広田の動きは何かと派手すぎました。雉子も鳴かずば撃たれまい、でしてね。先生や私の利権にまで手を伸ばそうとするから、こちらも防禦上、その手を叩く。まあ、やくざの世界でいう縄張りは守ってもらわないとね。まして私などは、先生のようにインドネシアが駄目なら韓国、台湾といった具合に、顔は広くないし、その才覚もない。一つの利権を大事に抱え込む。その利権に広田は手を出そうというのか、出したのか……」
「君、少し言葉を慎しみ給え！　利権ではない。応分の仕事に対する権益だ。我々はコーディネータであり、コンサルタントだ。国の方針さえ誤まらなければ、立派な報酬だ。政界の有象無象を動かすのは金だ。小人、金を好む、との格言があるが、その小人が多い政界では、自分の政治理念を通そうとするために、相応の収入がなければならん。要はその報酬をいかに有効に使うかだ」
「――――」
「ところで、君の収益だったF7Jの献金は、実際はいくら入ったのかね？」
「先生にお渡しした分に、ほんのちょっとのプラスアルファですよ」
「広田は、民間機を二十機余り売り込んだだけで、五億円の献金というじゃないか。一機五、六十億円の飛行機だから、会社側の儲けは知れたものだ。それに比べF7Jは、一機当たりは三十億円相当に過ぎないが、当時で百四十機の導入を決めている。総額でざっと四倍だ。最低で数億円は懐に入っただろう？」
「先生、そんな！　……。確かに、その後のP2EやF18の売り込みの前金ていどのものは受けましたが、とてもそんな額には……」
「あの時は、大分迷惑をした。鈴木産商の宝部とかいう若いのが会ってくれというから、サンフランシスコのホテルで、マクッド社の副社長からF7Jの性能説明だけは聞いた。その一寸した瞬間が宝部メモとして右翼や総会屋に流れた。あの男は、若いのに抜け目がなく、ハッタリが強すぎる」
「あれを流したのは等々力重雄です。宝部の腹心の一人が、メモをこっそりコピーして退職し、ラック社に寝返った。ラック社からフィクサー役の等々力に渡った、というのが実情のようです」
「そうらしいな。等々力は第一次FX（次期戦闘機）の時には、我々の強い味方だった。それに田川空幕将――。土壇場でのどんでん返しに成功したわけだが、等々力のあの時の応援で制服組の支持をとりつけ、ラックと紅屋商事に決まったようなものだな。彼は多分あの時は、半分以上が正義感だったろう。ところが、今度のラック事件の解明が

進んでみると、ラック社の手先のような仕事をしておった。第二次FXが決まった時に、事もあろうに総理である弟の藤田に対し公開質問状を突きつけた。今から考えれば、なんのことはない、ラック社のコンサルタントとして商戦に破れた腹いせをしたにすぎん。あの嗅覚の鋭い男は、弟が第二次FXで手を汚したことを知っていたのだろう。言わずと知れた防衛庁人事だ。君の要請で、私は弟に頼んだ。その結果、サウスノップF8を推す川野官房長を国防会議事務局長などに飛ばすなどして、F7Jに決まった。鈴木産商からの君への見返りは大きいはずだ。いくら懐に入ったかは、古くなった話だから聞かんが、君も臓に傷をもつ身だ。いつかは広田や等々力、あるいは私かも知れんが、しっぺ返しをくう恐れもあるぞ」

「先生、脅さんで下さいよ」

「脅しではない。同じ穴のムジナ、天網恢々とやら、覚悟は必要だ。ラック事件追及の急先鋒として君は調子に乗っているが、東京地検の調べの中には、当然、マクッド、グランダ、アロー関係の仕事ぶりの内容が、資料として集まってきているはずだ。新聞や雑誌にも、宝部や君、そして私の名前が過去の商戦の引例として洩れはじめている。四十七年の国防会議にまつわるP2Eの国産化白紙還元問題など最たる例だ」

「先生、そのP2Eの白紙還元、そいつが問題なんです。大利根が防衛庁長官だった一年前に、AEW(早期警戒機)は国産化と決め、業界のP2E製造体制もでき上っていた。それが棚上げされた時は、広田は航空機の利権……、いや権益まで手を伸ばそうとしているな、とこちらは頭に血がのぼったわけです。予算を口実にした巧妙な計略ですよ。P2Eの裏には鈴木産商と私が控えている、と利聡い広田は読んでいたにちがいありません。大利根も通産大臣として会議に出席していながら、自分が防衛庁長官時代に決定したことを目の前で覆えされても無言のまま。おかしいとは思いませんか」

「詳しいことはわからんが、何か臭いのする話だった。広田はなぜ尾っぽを摑まれたかわかるかね。本質が善人だからだ。人を疑うことを知らん。考えが直線的な行動となる。コンピューター付きブルドーザーと言われるが、コンピューターに自分の考えはない。計算速度が優れているにすぎん。もう一つの理由は、自分一人の力で成り上ったということだ。裸一貫から全速力で走りつづけてきたことに無理がある。過去はみな切り捨ててきた。だから良き友を得る暇がなかった。類は友を呼ぶのたとえで、友人や取り巻きはひと癖もふた癖もある人間ばかりのようだ。そこが世間でいう官僚派と党人派の違いなんだ」

「私も党人派ですよ」

「そう、だから先程も、用心しろといっている。しかも、君の場合は二代目、良きにつけ悪しきにつけ、悪太郎と言われたおやじさんの威光を背負って今日まできた。創設者

の苦労を知らないから、同じ悪でも、どこかに甘さがある。悪の裏に隠れた慈悲という感じがわからない」

「――――」

「ところで、こちらに火の粉がかかるようなことは避けてもらいたい。親しい司法界の友人は、みな退任してしまったし、その影響力も影が薄くなってきた。私も功なり名を遂げた。ほとんどが時効になったものばかりだが、汚名を着てあの世へ行きたくない」

「ご心配なく。検察もラック事件で手いっぱいでしょう」

「私の周りにも、生臭い人間が多すぎる。君をはじめ、あの宝部と仲の良い田辺八郎などは、それこそ利権漁りで目がギラギラしておる。いまは大川派でおとなしいようだが、将来なにかを起こしそうな人間だ。私の秘書にも、何人かそうした男がいる。宝部に会ったら、余りあこぎな商売をしなさんな、と言ってくれ給え」

「ところが、最近、彼との仲が余りよくないんですよ」

「そうかね。おそらく、君が彼を上回ってあこぎだからだろう?」

「アハハ。まあ、そうかも知れません」

東京・渋谷の木下首相の私邸、その応接間で首相の木下孝明は一人の男と対座していた。

昭和五十一年七月二十七日午前一時過ぎ――。

数メートル四方のさして広くない応接室には、煙草の煙がもうもうとたちこめていた。先程から木下がほぼ連続的に手にし、向いの男が差し出す卓上ライターで火をつけたケントから立ち昇る煙だった。すでにテーブル上のクリスタルの灰皿には、十数本の吸殻が固まっていた。

微かな音をたてて作動する中古のクーラーが、部屋の一角にはめ込まれてはいたが、庭に面する南側の窓はピッタリと閉ざされ、おまけに真夏であるのに天鵞絨（ビロード）の厚手のカーテンで覆い、また二ヵ所あるドアも完全に閉まっているため、上衣を着用する二人には、やや蒸し暑く感じる部屋の温度だった。

だが対座する二人は、その蒸し暑さを生理的に感じてはいても、意識下に置くことはなかった。極度の緊張、さらに神経が昂進していたからである。

とくに首相の木下に、それが顕著だった。紫煙を上げるケントを持った左手をソファーの肘掛けに置くと、黒縁の眼鏡を透して空間を凝視し、右手で肘掛けを軽く叩いたり、スリッパを脱いだ両足の踵で床を打ったり、時にはわずかな貧乏ゆすりさえ見せた。

「外為法の違反ねぇ……」

木下首相は空間を睨んだまま、自分に言い聞かせるように、しわがれた低い声で呟いた。

「外為法違反は法律違反にはちがいない。しかしねぇー、譬えは悪いが、交通違反のようなものではありませんか?」

「――――」

空間を見据えたままでの木下のそれとない問いに、対座する男は、双眸を木下の顔に当てているにも拘らず沈黙を押し通した。ひと重瞼、目尻がやや垂れ下った小さな両眼から、心もち強い光を発したにすぎなかった。

「確かにボクは、この問題の白黒をつけなければならないと思うし、また、そのような方針をとることを国民に約束してきました。しかしですねぇー、仮りにも前総理大臣を外為法違反容疑で別件逮捕というのは、何か暴力団と同様の扱いに思えるんですよ」

「――――」

木下の繰り言に、男はまた沈黙をもって応えた。

「身柄は当然、拘束するんでしょうなあー」

今度は、男は軽く頷き返した。

「法務大臣からの電話では、ただちに受託収賄でも訴追できるとの話でしたね。この面での確たる証拠――まあ、公判を維持できるかということですがね、その自信があるということですね？」

「あります」

禿げ上っているうえに、眉毛が薄いため、ことさら額が広く見える五十代半ばの男は、ここで真一文字に結んでいた大きめの口を開き、穏やかながらも凛とした響きを持つ声を発した。

木下は卓上の銀製の煙草入れからケントを一本手にし、自ら卓上ライターで火を付け、天井に向けて煙を吹き上げた。宙を睨みながら、右手で肘掛けを軽く叩く。

「外為法違反ねぇ……」

木下が頭の中で考えている懸念を、それとなく吐露した一人言だった。それから右足の踵で数回床を打った。

「身柄も拘束する――。完全な犯罪人扱いということですね」

木下はなおも宙を睨みつづけた。その額が紅潮しはじめた。

そうした一国の首相の動作を、対面している男は膝の上に両手を組んだゆったりした姿勢で眺めていた。男は時の首相と密室の中で対座して、初めは緊張していた。しかし首相の落ち着かない様を見るにつれ、逆に冷静さを取り戻し、いまは澄んだ眼で相手を観察しているという風情が見られた。

「総理――」

男の方から、初めて口を開いた。

「総理がためらわれるお気持ちはよくわかります。私どもも、外為法違反容疑で前首相の身柄を拘束することには、深いためらいがありました。しかし、これは法律上の手続きの問題です。受託収賄罪容疑では時間がかかりますが、外為法違反容疑ならば裁判所へ起訴しやすいからなのです。私どもとしましては間を置かず、収賄容疑も加えることになっています」

「――――」

木下は、穏やかに語る相手の顔をじっと見詰めた。ケントの灰が膝の上に落ちたのも気付かず、黙って相手の顔を見詰めていた。やっと自分から口を開いた男の次の言葉を待った。

暫く二人の間に沈黙が横たわった。男はテーブル上のコップを手にし、ストローから清涼飲料水を口に含んだ。飲料水がコップの中ほどまで減った時、男はそれをテーブルの上に戻した。それから元の姿勢にただすと、男は、

「私どもは……」

とやっと口を開いた。

「いや、少なくとも私は、このラック事件が表面化して以来この方、総理がこの事件に厳正なる立場で臨んでこられたことに対し正直、勇気づけられました。この種の事件につきものの干渉が一切なく、法と正義が守れることを感謝し、司法に生きてきた人間の一人として、事件の究明に一歩進めることを誇りに思います」

男は言葉つきこそ丁寧であったが、その語っている内容は、たとえ首相の要請といえどもこの件については譲れない、とする有無を言わせぬ威圧的なものであった。

木下は二度、三度頷いてみせた。その両眼に一瞬、かすかに怯えの光がよぎった。

「検事総長――」

木下は右手で肘掛けの端を小刻みに叩いた。

「私はね、広田君がああいうことで世間の疑惑を負い、首相の座を去った後で、〝クリーン木下〟と言われて登場した男ですよ。ですからあなたの言うとおり、この事件の究明には率先努力してきました。それはねぇー、民友党内外からのいろんな圧力がありました。しかし、国民の前に社会正義があることを示すことこそ、政治の浄化、政治の名誉につながると信じて今日まできたんです。ですから、あなたも御承知のとおり、この捜査で私が横車を押したことはない筈です。一度だけ刑事局長に公の立場でここへ来てもらい、大まかな経過を訊いたことはありますがね。それも周囲から好ましくないと言われてやめています」

木下はケントを手にし、自分で火をつけた。

「事件が表に出て以来、最初にして最後に、こうしてあなたと二人だけで内密に話すわけだが、これもね、この場に到って断念しろといっているのではない。誤解しないで下さいよ。新潟にいる法務大臣から夕方報告を受けた時、外為法違反と聞いて、私はね、率直に言って拍子抜けしたんです。そこで何か事情があるかと思って、深夜にこうしてあなたに来てもらったんです」

検事総長の長瀬力は、いまや沈着そのものの表情で木下の顔に視線をあてていた。長瀬はふっくらとした卵型の顔で、眉毛が薄く、広い額の直下に位置するような両眼は小さく垂れ目だったが、切れ長でもあった。形のよい鼻の下に、真一文字に結ぶ大きな口があり、それは男の意志の堅さと責任感を表わす象徴でもあった。

いま対座する二人の男――首相と検事総長はそれぞれの思惑によって一つの目的を遂げることで一致していた。それは前首相・広田栄三を逮捕することであった。

しかし、首相の木下孝明にとって、この期に及び躊躇する気持ちが強く湧き上がるのだった。いまでこそ敵対する相手ではあるが、四年前、広田を民友党総裁に押し上げ首相の座に就かせたのは、小派閥といえども最後のキャスチングボートを握った木下派であった。そして木下がシナリオを書き、広田が花道を踏んで日中国交回復を成し遂げた仲でもある。そのかつての〝蜜月時代〟の同僚に対し、因果とはいえ、自分の政権の時に手錠をかけねばならない運命の皮肉が、木下をして躊躇させる理由の一つだった。

こうした個人的感情を離れ公人の立場に立ってみても、広田の逮捕は、決して好ましいことではなかった。一国の首相経験者が刑事責任によって逮捕されるなどということは、平和時の近代国家に於ては極めてまれなことである。米国のウォーターゲート事件でも、米政府・司法当局は大統領職籍に敬意を表し、その身柄まで拘束はしなかった。

わが国では昭和二十三年、時の首相芦田均が昭電疑獄で小菅拘置所に拘留されたことがあるが、なにしろ戦後の混乱期、GHQの強い影響下にあった内閣での首班であるから、自主独立の大国となった今日と比べると、その社会的、政治的影響は、かなり割り引いて考えねばならない。

マスコミ、国民、そして一部の野党は、常に黒い翳を背負ってきた広田の逮捕を、おそらくこぞって歓迎するだろう。とくに多くの国民にとっては、首相は一種の天上人に近い存在であるから、また余りにも平和すぎて退屈ゆえのストレスが溜り過ぎた国民にとっては、時の権力者を悪役に仕立てたい欲望が充満しているから、まずは理屈抜きで広田の逮捕に拍手喝采することは間違いなかった。

しかし、経験豊かな政治家にとって、国民とは無責任な大衆であることを知悉しており、衆愚と同義語であった。確かに広田の逮捕に拍手喝采はあろうが、それは一過性のものにすぎない。ということは、悪役の広田に鉄槌を下せば、木下の人気は高まろうが、それも一時的なものにすぎないことを意味していた。

また木下は国民の人気を得る以上に、広田逮捕によるリアクションが何よりも怖かった。それは民友党内で燻り、いまにも発火しそうな木下に対する不満だった。少数派の木下派にとって、広田派をはじめとする他の派閥からそっぽを向かれることは、首相の座を失うに等しい。

四十九年十二月、首相に就任以来、木下はそれまで民友党内でタブーとされてきた問題と前向きに取り組んできた。その第一が政治資金規正法の制定だった。金のかからない政治を信念とする木下は、長い間議論の対象となっていた同法の制定に全力を傾けたが、野党からは骨抜き法案と罵られ、与党――ことに金脈問題で首相の座を失った広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.